

一人一人の子どものよさや可能性を最大限に引き出すために ～全ての学級に生かせる特別支援教育の視点～

教師が対応に苦慮する子どもは、子ども自身も学びにくさや生活しにくさを感じながら学校生活を過ごしています。子どものよさや可能性を引き出すためには、自己肯定感を下げない学校生活を送ることができるようにすることが大切です。そのためには、育ちを見守りつつ、自立を目指した適切な指導と必要な支援をバランスよく行い、過不足ない働きかけを継続していききたいものです。以下に支援のポイントを紹介します。これらの支援は、周囲の子どもにとっても有効な働きかけになります。

授業の準備では

つまずきの把握には

◎ 子どもの周囲の環境を考えましょう

環境に影響されやすい子どもがいます。

△ 掲示物や周囲の音などが気になり、授業に集中することが苦手な子どもは、その都度繰り返し注意されるため劣等感を生み出す可能性があります。

- 教室の正面（黒板や黒板周り）を整理し、必要なのは教室の側面などに掲示する。
- 座席の位置を工夫する。後ろが気になる子どもにとっては、一番前の席は必ずしもよいわけではない。
- 教師の視線、しぐさ、声の大きさやトーンを変化させるなど、子どもへの伝わりやすさを考える。

◎ 子どもの苦手さを理解しましょう

分かっていても実行できない子どもがいます。

△ 分かっていてもうまく行動に移せない子どもは、満足感や達成感を得た経験が乏しく、自分に自信がもてなくなり、学習意欲が低下してしまう可能性があります。

- 話すことが苦手な場合には、必要に応じて選択肢を示したり、書いて伝える方法を提案したりする。
- 読むことが苦手な場合には、教科書等の文字を拡大したり行間をあけたり、読む量を調整したりする。
- 書くことが苦手な場合には、重要語句を枠で囲むなど板書を工夫するとともにノートはどこに何を書くかのルールを指導する。

自己肯定感を下げない支援を！

指示や発問では

称賛や意欲付けには

◎ 子どもへの指示の仕方考えましょう

指示や説明を聞くことが苦手な子どもがいます。

△ 聞くことが苦手な子どもは、教師から繰り返し注意されることが多くなります。そのため自己評価が下がり、集団への参加を拒否する可能性があります。

- 「大事なことを一度だけ言います。」など、子どもの注意を引きつけてから話す。指示は短く、具体的に言い、重要なことは複数回伝える。
- 指示、説明と子どもの活動をきちんと分ける。
- 指示内容を可視化する。また、予定の変更はなるべく避け、変更する場合は、必ず予告する。

◎ 子どもを褒めたり、認めたりする方法を考えましょう

褒められる経験がとて少ない子どもがいます。

△ 褒められる経験が少ない子どもは、学級への所属感が育ちにくく、劣等感をもちやすくなり、自己評価も下がる可能性があります。

- 得意なこと、興味・関心があることに注目する。頑張りを認める個人内評価の観点を持ち、あたりまえのことでも周囲の子どもたちと同じようにできたら褒める。
 - 直接褒めることに加えて、校内の他の教師を通して間接的に褒めたり認めたりする。
 - 子どものよさや得意なことを生かし、人の役に立った、人に喜んでもらえた等の経験ができるようにする。
- ※ 叱責してはいけないということではなく、他人への迷惑行為などに対しては、譲らない姿勢で子どもに接することが大切です。

◇ 保護者と連携するためには ◇

子どものよさを日常的に伝え、信頼関係を築きましょう。心配な点について話し合う際にも、**まず、保護者自身をねぎらう言葉かけをしてみましょう。**保護者の願いや困っていること等に耳を傾けるとともに、授業中の様子や支援した内容・方法を伝え、うまくいったこと、うまくいかなかったことを共有しましょう。

また、保護者との共通理解のもと、**一貫性のある指導を**することが、結果的に子どもの社会性を養い、将来の自立につながることを様々な機会を通して繰り返し話し合ひましょう。

保護者が不安になる教師の「ことば」

- 「困っています」
- 「どうしたらいいか専門家に聞いてきてください」
- 「忙しいので・・・」
- 「他の子もいますから・・・」

話し合った内容は「個別的教育支援計画」に記入し、保護者との懇談や関係機関との連携、就学時や進学時等の引継ぎに活用しましょう。

